

私の提言

「生きる力」に

つながる防災教育を

一般財団法人防災教育推進協会常務理事・事務局長

濱口 和久



防衛大学校卒、日本大学大学院で博士課程前期課程で博士課程了、名古屋大学大学院で博士課程後期課程に在学中。現在、拓殖大学大学院地方政治行政研究科特任教授・防災教育研究センター長。

防災に関わる団体は専門家が中心になっているところが多いのですが、一般財団法人防災教育推進協会では、専門家の他にマスクミ関係者や教育関係者、企業の関係者なども参加しています。学校の防災教育を民間の立場から応援していること、防災の検定を実施する協会として立ち上げました。

防災では単に知識としてだけでなく、自分で判断して行動できる力が特に必要です。私たちが始めた「ジュニア防災検定」は、小・中学生を対象に、子どもたちの「防災力」を養い、家族で防災に取り組むきっかけになるような検定を目指しています。

「防災力」とは、具体的には①日ごろから災害に備えた準備ができる②災害時に生命を守るための行動ができる③未来を創る1人として防災・減災のために何ができるのかを考えることができる—ことです。このため、筆記試験に加えて、家族で防災について話し合ったことをレポートしてもらったり、防災自由研究に取り組んでもらい、それらを総合評価しています。

防災自由研究などの内容を見てみますと、大人の視点ではなく子どもらしい視線で、地域を歩いて気が付いたことなどをまとめています。大人から見るといたしたことがないように思えても、子どもたちが「ここが危険ではないか」と指摘したことに大人が気付かされることもあります。ある男子中学生は、鉄道が面白かったため、東京の主要な鉄道の地盤

と地下水の関係などを調べて自由研究していました。学校の教科の学習では習わないことですが、その生徒にとっては好きな鉄道を防災の視点から調べて、まとめることが、主体的な学びにつながったのではないのでしょうか。

また、コロナ禍にあつて、ジュニア防災検定の課題の一つである家族防災会議レポートを、休業中の学習課題として実施するように指導している学校もありました。

ある小学校の女子児童は、「自分は、あや取りが得意だから、避難所の小さい子どもたちにあや取りを教えたい」と回答していました。「防災力」とは、結局は生きる力につながるものであり、実際に周りの状況を見て、自分は何ができるかを考えて、行動ができる力です。

こうした力は、学校の教科教育だけでは身につかないものですし、テストなどで点激化することにはなじまないものです。生きる力という点では、これからの時代、何が起るか誰にも分からないわけですから、学校関係者には一つの教育プログラムとしてジュニア防災検定を活用してもらいたいと願っています。